第24回言語教授法・カリキュラム開発研究会　全体研究会
「外国語教育を通しての異文化・自文化理解」

――各言語担当者の発表と参加者を交えての全体討議――

甲南大学　国際言語文化センター
『言語と文化』第12号（2008年３月）抜粋

第24回言語教授法・カリキュラム開発研究会
全体研究会

「外国語教育を通しての異文化・自文化理解」
―各言語担当者の発表と参加者を交えての全体討議―

第24回言語教授法・カリキュラム開発研究会全体研究会は、「外国語教育を通しての異文化・自文化理解」というテーマで2007年12月15日（土）午後13時30分から511講義室で開催され、33名の参加者があった。

◆開催日時　2007年12月15日（土）　13時30分～16時

◆受付時間　13時～

◆開催場所　甲南大学　5号館1階511講義室

◆次　第

13：30～13：35　開会の挨拶　国際言語文化センター所長　教授　胡　金定

13：35～13：40　発表者紹介

13：40～15：00　各言語発表（各15分）

ドイツ語　国際言語文化センター准教授　柳原　初樹

フランス語　国際言語文化センター准教授　D.シッシュ

韓国語　国際言語文化センター准教授　金　泰虎

中国語　国際言語文化センター講師　石井　康一

英語　国際言語文化センター教授　中村　耕二

15：00～15：10　休　憩

15：10～15：50　全体討議

15：50～16：00　閉会の挨拶　国際言語文化センター教授　津田　信男

（総合司会）　国際言語文化センター教授　原田　登美

16：20～　懇親会　甲南大学生協3階バンケットルーム

各言語発表要旨

ドイツ語　柳原　初樹

ヨーロッパはその誕生において、他言語習得と統治が密接に結びついていた。例えば、フランク王国の成立においても、フランク・ゲルマンの部族社会からローマ・キリスト教的普遍世界への移行はラテン語を通じてのみ可能であった。ラテン語に習熟した僧侶・官僚によって、キリスト教とローマの統治システムがヨーロッパに受け継がれた。ローマが存在しなければヨーロッパの誕生もありえなかった。また、神聖ローマ帝国は多言語領域であった。皇帝の多くは多言語を習得し、例えば13世紀のシチリア王フリードリヒ２世はギリシャ語、ラテン語、アラビア語、イタリア語、ドイツ語、フランス語、シチリア語に通じ、イスラム文化への深い理解によって、武力ではなく、交渉と話し合いによってエルサレムの共同統治を可能にした。

世界文学の必要性を主張したゲーテも、英語、フランス語、イタリア語、ドイツ語、ギリシャ語、ラテン語、ヘブライ語に精通していた。異文化理解がテーマになるときによく引用される彼の言葉：Wer fremde Sprachen nicht kennt, weiss nichts von seiner eigenen.（外国語を理解しないものは、母国語について無知である。）は、外国語の習得により、ドイツ語の長所、限界、独自性を知ることが出来るということを述べている。我々が言語を深く理解するためには、その言語の歴史的背景、他の言語との絡み合や共通性、差異を知ることが必要であることを語っている。最後に20世紀の言語哲学に大きな足跡を残したヴィットゲンシュタインの言説を紹介したい。

If we spoke a different language, we would perceive a somewhat different world.

The limits of my language are the limits of my universe.

フランス語　ディディエ・シッシュ

甲南大学国際言語文化センターでのフランス語教育の目的は、国際人を育てることである。その基礎となるのが、一般的な内容で話す・読む・書く能力を身につけるだけでなく、世界には英語だけでなく多様な言語と文化が存在することを理解し、さらに言語の背景にある文化と価値観を認識することである。加えて、自国の文化に対する客観的な眼差しをもつことも忘れてはならない。外国語を学ぶことは、その背景にある異なる文化を知ることでもある。なぜならば、言語にはそのことばに根ざした世界観が反映しているからである。このことは、日本語・フランス語間の翻訳が難しいことからも分かる。日本語の常体と敬体の違いは、フランス語ではTu/Vousの使い分けによって表現されるし、縦の人間関係を重んじる表現の多い日本語を横の関係を重視するフランス語に直訳できない場合も多い。例えば、「よろしく

お願いします。」という日本語の日常的な表現でさえ、フランス語にする際にはフランス文化の中で適切な表現を考える必要がある。挨拶や礼儀の表現だけでなく、プライバシーの概念も文化によって異なる。中級・上級の学習では、男女間のマナーなども含めて、常識のある大人として発言していくための文化的アプローチが欠かせない。

21世紀の国際人とは、外国のことを自分の中に取り組むだけでなく、日本文化の持つ普遍的価値観を世界に向けて、適切な言葉で発信できる人である。

韓国語　金　泰虎

文化には、伝統文化など変化しにくいものと、大衆文化に見られるように変化しやすいものがある。授業では、韓国人のアイデンティティ形成に関わる文化、大衆が共通して示す行動や認識の文化を段階的に教授している。

マスメディアが伝える外国の日常的な文化は、海外では典型的な文化として誤解され、偏ったイメージを形成しやすい。こうした認識から、授業では韓国で多数の人々が享受している大衆文化を取り上げることが重要と考える。主に言語の教育を行っている韓国語の科目でも、テキストに登場する短編的な文化に関する内容にも触れるようにしているが、本格的には、「韓国事情」（現代文化中心）と「言語と文化」（伝統文化中心）において取りあげている。

学生たちは言語科目や文化の授業を通じて韓国を理解するようになるが、それが頭だけの理解にとどまらず、本当のものになるためには、「夏期講座」や「長期留学（１年間）」に参加して人々と社会を直接体験することが大切である。お隣の国であっても、上下関係が厳しく物事を直接的に表現する韓国とそうではない日本と、コミュニケーションに大きな影響をもつ文化的な相違がたくさんある。学生たちが、授業を通じて異文化としての韓国を理解するだけでなく、自文化としての日本をより深く理解するようになることを望んでいる。

中国語　石井　康一

コミュニケーションを円滑に行うためには、言語能力と文化理解と双方ともが重要である。いくら流暢な中国語で話したとしても、誰と話しているのか、どのようなコンテクストで話しているのかによって表現は異なり、場合によっては誤解を生むことになりかねない。食事においてお酒が持つ意味や「対」の概念、挨拶表現や褒め言葉など、言語に映し出されている中国文化特有の事柄を理解することが重要である。

一年生の基礎中国語教育の限られた時間の中で言語的な基本をしっかりとマスターさせ、また中級・上級へと学習を継続するモチベーションを与えるために文化への興味・関心を高める工夫が必要である。日常の授業の中で、教師の体験から異文化を語ることにより学生たちの興味を喚起できる一方で、狭い体験から話すことの怖さも感じる。しかし、中国における対外漢語教学（外国人留学生向け中国語教育）研究でも述べられているように、学習者が本当に使える中国語を身につけるためには、初級段階から文化教育を導入することが肝要で

ある。現在、一般的に中国語入門の教科書が薄く軽くなっている中で、今年から採用している基礎中国語の統一テキスト『中国語コミュニケーション・ステップ24』（胡金定・吐山明月著　白帝社）は、文法の例文も中国の生活・文化に直結した表現を採用して、生きた中国語を最短距離でマスターできるよう工夫している。ビジネス界で活躍できるような使える中国語を習得し中国文化を理解する学生を育てたい。

英　語　中村　耕二

外国語教育は他者を理解し、目標言語で自己表象できる能力を開発し、異文化間コミュニケーションや国際理解に至る言語文化教育である。広義には、外国語教育は人類の共存のためのコミュニケーション能力を育む人間教育とも言える。外国語教育に従事する我々は文化の提供者（Cultural Informant）であり、文化の定義、文化相対主義、自民族中心主義、オリエンタリズム（西洋中心の東洋観）などの理解が必要である。これらの概念は国の歴史文化に深く影響している。

さらに、異文化理解、自文化理解のための４つのリタラシーを育むことも望まれる。まず、自文化を認識する能力で、社会の成員が共有し、社会の営みに必要な知識運用能力である文化リタラシー（Cultural Literacy）。次に、異なる文化的背景を持つ者同士が出会い、交流する際の相互の文化的伝達能力、調整能力である異文化間リタラシー（Cross-cultural Literacy）が必要である。また、異なる他者を受け入れる能力や異文化間での異質なものへの寛容性、すなわち異文化間トレランス（Cross-cultural Tolerance）も重要である。最後に、国際化、多文化化という国際社会の変化に対応し、多文化共存を目指す社会に生きる人々に求められる能力や資質として、多文化リタラシー（Multi-cultural literacy）が求められる。

全体討議

15分という非常に限られた時間の中で、各言語の発表者が学生の異文化理解と自文化理解の養成のために重要と考えていることや授業で実践していることについて講演を行ったのち、予定通り全体での討議が実施された。学外の教員、甲南大学非常勤講師、退職後に言語学習を再開した聴講生、甲南大学生、職員の方など多様な立場と学習経験から、日ごろ言語や文化教育について感じていることや、授業を通じて疑問に思っていることが忌憚なく述べられた。初級外国語の授業では何をまず教えるべきか、中級・上級へと学生の言語学習の継続を促すためには文化の要素をどのように授業に取り入れていくべきか、また、異文化・自文化を理解するためには複数の外国語の習得が大事ではないかなど、参加者から有益な意見が出された。

各言語の発表時間が限られていたために、発表者の言語と文化についての考えを十分に伺うことができなかった。今後の研究会や講座でじっくりとお聴きする機会を待ちたい。

（文責：藤原三枝子）